



千葉県 株式会社カクタ  
「地域医療を中心とした総合的社会貢献」事業



株式会社カクタ 代表取締役 社長  
三浦義弘さん

選考理由

社会貢献活動審査委員会  
委員  
永井多恵子氏



地域の安心・安全は何より共生社会にとって大切です。幼児の急病、交通事故など、救急医療体制の重要性も指摘されています。こうした折、救命に大きな役割を果たす救急車の整備は欠かせません。株式会社カクタは永年にわたり関係行政機関へ救急車の寄贈を行い全店舗に「AED」を設置、さらに社員が救命の実践部隊として貢献できるよう救急救命講習への参加をすすめるなど、地域の総合的な社会貢献に多大の成果をあげています。

地域密着を旗印に求められるものを還元していく

地域ニーズの高い救急車寄贈と AED 全店設置

千葉県、茨城県、埼玉県の3県で、パチンコホール「パールショップともえ」とパチスロ専門店「7 G・E・T」を26店舗運営(グループ企業運営分を含む)する株式会社カクタ。前身は米、落花生、ゴボウなどの農産物加工を行う企業で、パチンコ店経営を主軸にするレジャー産業に参入したのは、1978年(昭和53年)のこと。以来、「創造と挑戦」を社訓に、古い慣習や固定観念にとらわれないイノベーションを展開し続け、千葉県下でも有数のアミューズメント企業として成長を遂げてきた。

その根底にあるのは、お客様第一主義であり、地域との関わりを重視しながら、地域とともに発展しようとする地域密着の姿勢である。それゆえ、企業としての成功を地域社会に還元してこそ存在価値があるという考え方に貫かれている。その象徴的な例が、地域の救急医療体制の充実を図るための救急車の寄贈である。

(株)カクタでは、1988年に佐原市外五町消防組合多古分署に、93年に佐原市外五町消防組合栗源分遣所に、2008年に香取広域市町村圏事務組合多古分署に、それぞれ救急自動車1台を寄贈した。特に2008年に寄贈した救急車は、動くICU(集中治療室)とも言える最新の高規格救急車であった。

「首都圏とはいえ、このあたりは過疎化が進んでいる地域です。住民の高齢化に伴い、救急医療に対するニーズも高くなっています。そうした地域の要望に応えたいという思いから救急車を寄贈することにしました」と語るのは、カクタ社長の三浦義弘さん。もっとも大切な「いのち」を守ることへの貢献は、住民はもとより、行政や医療機関からも高く評価されている。

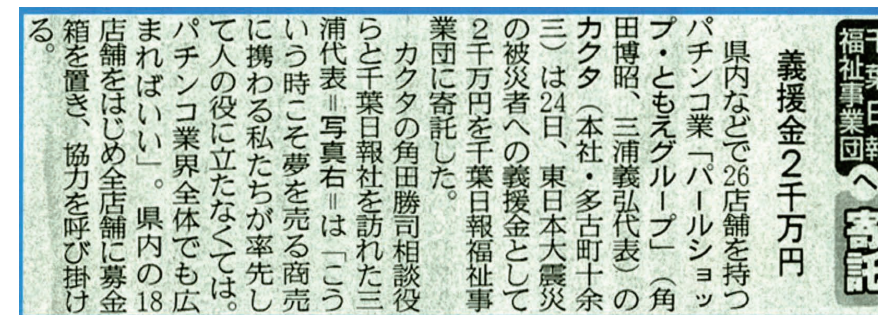
いのちへの貢献ということでは、(株)カクタでは全店舗にAEDを設置し、地域住民や遊技客の万一の事態に備えている。「消防署の方に来ていただいて指導を受けたり、あるいは消防署で行われる講習会に参加するなどし



寄贈した最新の高規格救急車



ホールカウンターに設置されている「まごころ宅急便」用の箱



東日本大震災の被災者への義援金として、2,000万円を寄託した活動が3月25日付の千葉日報で報道された

て、全従業員が救急救命手当の講習を受けています。地域の多くの方々が集まる場所ですから、AEDの設置は接客業、サービス業として当然の責務と考えています。もちろん、それを実際に使えることが大切なこと。そのため講習会受講です。一方、最近では感染症への対応も重要なことです。そのため応急キットなども全店舗に備えています。これは、スタッフの生命を守ることに繋がります」と、三浦社長。

スタッフが中心に取り組む「まごころ宅急便」

このほかにも営業管理部を中心に、従業員が主体となって取り組んでいる社会貢献活動がある。そのひとつが、「まごころ宅急便」である。これはお客様の理解のもとに進められているもので、端玉をお菓子などに換えていただき、それを集めて地域の児童福祉施設や社会福祉施設などに隔月で届けるというもの。「私自身、クリスマスシーズンにプレゼントを持って授産施設を慰問したことがあ

りますが、そのときに抱きついてくる子どもたちの姿を見て、私たちにできることがもっとあるのかもしれないという思いを強くしました。そうした思いから始まったのが、まごころ宅急便です。今では、私どもの店舗のみならず、その店舗が所属する支部組合全体の活動に発展したケースもあります」と、三浦社長は話す。

会社からの指示ではなく、従業員が主体となって動くという姿勢は、社会貢献・地域貢献活動が企業文化として根づいているということの証しだろう。今回の東日本大震災でも、(株)カクタでは義援金2,000万円を千葉日報福祉事業団に寄託。また、全店舗を10日間休業とし、従業員全員が各地のボランティアセンターに登録し、それぞれの場所でボランティア活動に従事したり、水を災害センターや避難所などに配った。全店舗休業という決断も、トップダウンではなく、ボランティアに行きたいという従業員からの声に押される形だったという。今後、ますます、地域の中で重要度を増していくに違いない。